

## 日本国際文化学会研究奨励賞受賞論文 『在外ペルー人が問いかけるもの』

Lessons that We Can Learn From the Peruvians in the World

山 脇 千賀子\*

Chikako YAMAWAKI

2010年度第2回日本国際文化学会研究奨励賞をいただいた論文題名は「在外ペルー人が問いかけるもの—グローバル化のなかのナショナル・アイデンティティの行方」である。本論文は『叢書グローバル・ディアスポラ第6巻ラテンアメリカン・ディアスポラ』を構成する一章であり、筆者はこの章のほか終章「ラティーノの可能性」も執筆している。

本書の基本的な編集方針は、ラテンアメリカをその基層において移動性が組み込まれた地域として浮かび上がらせることであった。20世紀から21世紀にかけて急速に進行したグローバル化のなかで、植民地時代から「伝統的に」移民受け入れ地域としてイメージされることの多かったラテンアメリカ諸国が、一転して移民送出地域として位置づけられる傾向が強まった。こうした現象の背後には、移民受け入れ地域と送出地域の間にある経済格差が作用していることは確かだが、それだけでは捉えきれない政治的・社会的・文化的な要因が働いており、そうした複雑な要因の絡みあいのなかで「ディアスポラ」という新しい国境を越えた主体が形成される可能性について、世界に拡散したラテンアメリカ（人）をめぐる動きを事例として提示した。

日本でも1990年代以降のラテンアメリカからの「日系人」による「デカセギ現象」は、多くの研究者の注目を集めて、多様な学問分野からの調査・研究が積み重ねられてきた。しかし、

これまでの大部分の調査・研究は、「デカセギ現象」を日本と出身国の間における日系人という特殊な民族的バックグラウンドをもった人たちの「環流移民」として捉えるパースペクティブを大前提としたものであった。

これに対して、本書が提示しているパースペクティブは、ラテンアメリカからの出移民状況をグローバルな観点から捉えることである。「デカセギ現象」は日本にだけ起こっているのではなく、イタリアやスペインなどの移民をラテンアメリカに送り出した国においても見られることであり、祖先の出身国への出移民は他の多くの選択肢と同様に、人生における一つのチャンスにすぎない。このような国境の有無をほとんど問題にしないような移動に対する意欲の高さは、一般的な現代日本人の感覚とは根本的に異なるものであるだけに、その意味が正確に理解されていない恐れがある。

2009年現在の出入国管理局データによると在日ペルー人の外国人登録者数は57,464人であり、在日外国人人口数としては5番目に大きい（第1位中国人、第2位朝鮮・韓国人、第3位ブラジル人、第4位フィリピン人）。このこと自体、多くの日本人には認知されていない事実であろう。また、文教大学湘南校舎の所在地である神奈川県は在日ペルー人人口が特に集中している地域であることも地元の日本人にはあまり知られていない。

\* 文教大学国際学部准教授

他方、ペルー側からみると在日ペルー人の在外ペルー人人口に占める割合は約1.7%にすぎない。2008年時点でのペルー外務省筋の推計によると、在外ペルー人人口は約300万人に上る。これはペルー総人口の約11%にあたる。最も多くのペルー人が在住しているのは米国で約150万人に上るものとみられ、日本在住の約6万人を除いた残りを、地理的に近い中南米諸国（例：アルゼンチン、ベネズエラなど）と歴史的に縁の深いEU諸国（例：スペイン、イタリアなど）に半数ずつ分布させている。つまり、在外ペルー人は南北アメリカ大陸と欧州の間に広く拡散している状態にあり、ほんの一握りが日本に来ていることになる。

こうした事態を受けて、ペルー外務省は2001年に在外ペルー人コミュニティ課を新設して、在外国民に対する政府としての行政サービスの向上の意思表示をすると同時に、在外ペルー人を積極的に国家開発プロジェクトに巻き込むためのプログラムを打ち出すようになった。その背景には、在外ペルー人による母国の家族支援を目的とした送金額が国家経済において大きな意味をもつほどに成長している実態がある。

以上で描写したペルーからの出移民状況は21世紀に突入して以降加速しており、ほとんどの南米諸国に共通した特徴をもつ。2007年のある社会調査によると「条件さえ整えば移民するつもりがある」と答えたペルー人は約70%にも上

った。これに対して、2010年日本の内閣府が行った調査によれば、海外で就労することに関心のある日本人は22%にすぎない。

受賞論文では、在外ペルー人を中心に据えてトランスナショナルな組織活動が行われている状況と国家にとってそのようなトランスナショナルな動きがどのような意味をもつものとして捉えられているのか、さらには「ペルー人」というナショナリティを担保しているものが脱領域化している実情を描き出したつもりである。そこには、従来の近代国民国家体制のもとでナショナリティを議論することの限界が見えており、トランスナショナルな主体のあり方にはどのような可能性があるのかについての示唆があると考える。

グローバル化が進むことによって、世界のどこに生活する人々であろうと、ますます「ディアスポラ的に生きる」ことが強いられているのかもしれない現代社会において、われわれがラテンアメリカ（人）から学ぶべきことは少なくない。

#### 【文献】

山脇千賀子「在外ペルー人が問いかけるもの—グローバル化のなかのナショナル・アイデンティティの行方」中川文雄・田島久歳・山脇千賀子編著『ラテンアメリカン・ディアスポラ』明石書店、2010年、pp.135-164.